

研究ノート

栃木県の日本語教室の現状

——日本語教室担当者へのアンケート・聞き取り調査を通して——

高橋節子

I. 始めに

1990年に「出入国管理及び難民認定法」の一部が改定されて、ブラジルやペルーなど南米に在住する日系人が、定住者、配偶者などの在留資格を得て、日本で定住就労することが可能になった。当初、南米日系人は「出稼ぎ」目的で来日し、数年働いて母国に帰るものと考えられていた。しかし、最近、昨今の不況の影響で在日期間が長期化する傾向が見られる。南米日系人は家族と一緒に滞在することが多く、それに伴って日本語が不自由な子どもたちが日本の公立小中学校に大勢入学してくるようになった。

栃木県には2004年12月末日現在で、約32,000人の外国人登録者がいる。国籍別では、ブラジル(約9000人)、中国(約5500人)、ペルー(約5000人)、フィリピン(約3500人)の順が多い。市町村別では、宇都宮、小山、足利、真岡の順で多くなっている。

こうした事態に対して、栃木県では、1991年よりポルトガル語とスペイン語の習得を目的とした小中学校教員の内地留学を実施している。白鷗大学では今まで51人のスペイン語の内地留学生を引き受けてきた。彼らは、研修終了後、日本語教室¹担当者として外国人子女教育に関わることも多い。

2005年2月に、筆者は、内地留学生と協力して、県内40²の日本語教育担当教員を対象としたアンケート調査を行い、29校から回答を得た。また、2005年度中に、県内の11の日本語教室と二つのブラジル人学校を訪問し、担当者から聞き取り調査を行った。1999年度にも内地留学生と協力して、栃木県内の拠点校に対してアンケート調査を行ったことが

¹日本語が不自由な外国籍の児童生徒が多い学校に置かれる特別教室。「ハロールーム」「ワールドルーム」などと呼ばれることもある。児童生徒は、普通学級に所属しながら、必要に応じた時間だけ日本語学級に通う。これを「取り出し授業」と呼ぶ。教員が外国人児童の所属するクラスに入って指導することもある。「入り込み授業」と呼ばれる。

²河内地区：小学校6、中学校2、上都賀地区：小学校1、芳賀地区：小学校6、中学校3、下都賀地区、小学校5、中学校2、那須地区：小学校4、安足地区：小学校8、中学校3。合計：小学校30、中学校10。このうち、栃木県教育委員会による拠点校は39であり、市独自で設置している日本語教室が1校(小学校)ある。また、2005(平成17)年度より、今まで中学校に拠点校がなかった那須地区の中学校に新たに拠点校が設けられた。したがって、現在、栃木県内に日本語学級のある学校は41校(小学校31、中学10)となる。

アンケートの回答があったのは、河内地区：5校(3校)、上都賀地区：1校、芳賀地区：5校(4校)、下都賀地区：7校(0)、那須地区：4校(0)、安足：7校(4校)であった。カッコ内は回答がなかった学校数である。

小山市、佐野市、那須地区の学校からはすべて回答を頂いた。回答率が低かったのは、足利市、真岡市、宇都宮市である。真岡市と宇都宮は外国人が非常に多い地域なので、この地区からの回答が少なかったのは残念である。

ある³。本稿では、2度のアンケート調査と聞き取り調査を基に、できるだけ日本語教室担当者の生の声を通して現場の様子を語ることを目的とする。あくまでも、教師の視点に焦点を当てた現状分析なので、外国人の子どもの視点、クラスメートの視点、保護者の視点、など、多角的な視点を通じた総合的な分析ではないことをあらかじめお断りしておく。

II. アンケート調査の回答から⁴

アンケートの質問項目をすべて網羅するのではなく、現状を語るに相当と思われる項目を拾い上げて提示する。アンケートに未回答の学校があるので、他の資料で補える場合は数字を補っている。

1. 現在、在籍している外国人児童生徒は何人ですか？（アンケート項目には下線を施す）

2005年（平成17年）2月回答時の数字である。外国人児童生徒は転入転出が激しい。

1～3名：1校、 4～6名：6校、 7～10名：9校
11～15名：3校、 16～20名：2校
21～25名：1校 26～30名：3校
30～39名：1校（30名）
40～49名：2校（45名⁵、49名⁶）
50名以上：1校（90名⁷）

2. 日本語学級に通級している外国人児童生徒は何人ですか？（他校からの通級生を含む⁸）

1～3名：5校、 4～6名：7校、 7～10名：11校
11～15名：4校、 16～20名：2校(20名)⁹ 21～30名：0
30名以上：2校(32名、37名¹⁰)

外国人児童生徒のすべてが日本語学級に通級するわけではない。日本語能力に問題がある場合にのみ通級となる。ただし、何をもって「日本の能力に問題あり」とするかの客観的

³ 高橋節子、2000年「年少者に対する日本語教育の諸問題－栃木県における事例を中心に－」『白鷗ビジネスレビュー』Vol.9、参照。

⁴ 『平成16年度内地留学報告書 スペイン語』にアンケートの内容と集計結果が載っている。ただし、数字に集計ミスがある。両方で数値が異なる場合は、本原稿の数値が正確である。

⁵ 小山市内のA小学校である。小山市は2004年(H.16年)で、4717人の外国人登録者がおり、その数は年々増加している。宇都宮市に次いで県で2番目に多い。人口に占める比率は2.97%で、真岡市に次いで2番目である。（栃木県国際交流課ホームページ）

⁶ 真岡市内のB小学校。アンケートの回答がなかった。数字は2005年10月1日現在のもの。

⁷ 真岡市内C小学校。アンケートへの回答がなかった。この数字は2005年●月現在のもの。

⁸ 全部で6つの小中学校で、他の学校からの通級生を受け入れている。教員自ら他校に出向く例も2校ある。通級の場合は、小学校の先生が中学生を見る例、中学の先生が小学生を見る例がある。小学生が通級する場合には、通学の足が問題になる。小学校の教員が中学生の勉強を見る場合は、高校進学も視野に入れなくてはならない。情報不足で教員は困難を感じる。

⁹ 一つは小山市内のD小学校、もう一つは真岡市内のB小学校(数字は2005年10月1日のもの)

¹⁰ 佐藤慶子・荻部絵美、2004、より。数字は平成16年5月のものである。

判定基準は今のところない。学級担任や日本語教室担当教員の判断、本人や親の希望などを考慮して決められている¹¹。

もっとも少ない日本語教室は2名の在籍である。同じ日本語学級といっても、2、3名の通級者しかいない学校と、30名以上もいる学校とを同一には論じられない。通級生が20名以上いるのは、真岡市の2小学校と小山市の2小学校¹²である。37名と最も多いC小学校は、1999年の調査時点では在籍者が61名だったのが90名と大幅に増えている。

人数が多いと、個々に応じた十分な指導ができない。現学級のみで授業を受けるのは困難と判断される場合であっても、日本語教室への通級を打ち切らざるを得ない。また、学級への受け入れ自体ができないこともある。

「子どもが人数が多いので、ある程度日本語ができる児童は受け入れができない。受け入れてほしいという要請が現学級(児童が所属している学級)の担任から寄せられることがあるが、応じられない」

「外国人の在籍数が多いので、日本語が話せるようになると通級を打ち切らざるをえない。その基準は2年生程度の漢字の読み書きができる程度である。学習言語まではフォローできない」¹³

子供たちにとって、日本語教室の人数が多いことは、単に学習時間が制限されることのみを意味しない。日本語学級で母語を使える安心感から、どうしても日本語を習得しなければならないという必要性が薄れる可能性もある。皮肉なことに、日本語学級が日本語を学ぶ場である以上に、友人とスペイン語やポルトガル語で会話をする場として機能してしまうことにもなりかねない。

「日本語学級に来る子は多い子で週10時間以上。日本語教室に来ると、日本語を話さなくすむので、まったく話さない子もいる。」(中学校)

「去年4年生で来た女の子は、クラスにポルトガル語ができる子がいて、日本語を覚える必要がない。5年生になっても、簡単な挨拶程度しかできなかった。」(小学校)

在籍児童数が少いと、一人一人に目が行き届く反面、次のような問題もある。

「児童数が減っている。日本語ができる児童だけ(漢字だけができない)の通級になっているのでやりがいがない。他の教師から暇でいいみたいに言われる時がある。雑用係のようになってしまっている。もっと勉強して専門性を身に付けたいが、その時間がない。」(アンケート)

¹¹近年、JSL(日本語を母語としない児童生徒の日本語能力を把握するために、「JSLバンドスケール」という考え方が提唱されている。アンケートではこれに言及している回答はなかった。

¹²「家賃が安いなどのうわさが広まり、特にA小学校地域で外国人が増加している。」(同地区の教員の話)

¹³佐藤慶子・苧部絵美、2004。

3. 国籍と人数を教えてください。(他校からの通級生も含む)

公立小中学校に就学している外国人児童生徒については、県教委発表の数字がある。2005年5月現在、多い順に、ブラジル 412 人、ペルー341 人、中国 103 人である。

われわれのアンケートでは、学校全体における外国人児童生徒の人数ではなく、日本語学級に在籍している児童数とその国籍を尋ねた。回答のあった 29 校の数字のみであるが、結果は次のようになった。

ブラジル：102	ペルー：79	日本：20
タイ：8	アルゼンチン 8	フィリピン：6
パラグアイ：5	中国：5	台湾：3
ボリビア：3	チリ：1	アメリカ：1
ベトナム：1	パキスタン 1	ブラジルとペルーの二重国籍 1

ブラジル、ペルー国籍に次いで多いのが日本国籍の児童である。日本国籍の子どもたちが日本語教室に在籍している、という事実を初めて知った。前回のアンケートでは現れなかった現象である。また、県教委が実施している「外国人児童生徒の国籍」でも当然抜け落ちる。「日本国籍」は「外国人の国籍」ではないからである。実際、ある日本語教室担当教員は、「県が毎年実施している学校調査がある。そこで『外国人児童、外国人生徒』という表現があるが、これはどういう意味なのか、毎年、調査票に記入するたびに迷う」と話していた。今まで、「日本人＝日本国籍＝日本語話者」という等式をほぼ自明のこととしてきたが、この等式は明らかに成り立たなくなっている。

本人が日本国籍でも、親のどちらかが外国籍であれば(「外国人」として)通級を認めている、ということである。日本国籍をもつ児童は、保護者のどちらかが外国籍(フィリピン、中国、アルゼンチン、ブラジル、タイ、等)である。

こうした現状を踏まえて、「外国人児童生徒」という呼び方も変更を迫られる¹⁴。ここでは、日本語学級に通級するのは「外国籍」児童生徒のみではない、という認識をもちなら、従来通り「外国人」という呼称を使用する。

二重国籍の子もいる。

「(子どもは)日本国籍、ブラジル国籍どちらももっている可能性がある。親もよく分からない。パスポートや外国人登録証をみて国籍を決める。見せるのをいやがる場合もある」

日本語学級に在籍するのは、南米かアジアのいずれかにルーツを持つ子どもたちである。南米系 199 人、アジア系 24 人(日本国籍を除く)となり、圧倒的に南米系が多い。以下、外国人児童生徒について述べる場合には、主にこの南米日系人の子供たちを念頭に置く。子どもたちの母語は、ポルトガル語 102 人、スペイン語 96 人(二重国籍の一人を除く)となり、

¹⁴ 「異文化を背景にした子どもたち」「外国につながる児童」「マイノリティ児童生徒」といった名称が用いられることもある。

ほぼ同数である。全国的にみると、ポルトガル語を母語とするブラジル系日系人のほうがずっと多いが、栃木県に関する限り、ペルーを始めとするスペイン語圏からの移民の割合が相対的に高い。

4. 平成 16 年 4 月から現在(17 年 2 月中旬)までの間に入室した児童生徒・転校（退学）した児童生徒はいますか？

入室：89 人

転校（退学）：53 人

外国人児童生徒の移動は激しい。回答時点で総数 241 人の日本語学級で、過去 10 ヶ月ほどの間に 89 人の入室、53 人の転出がある。出入りの激しいところでは、児童生徒の在籍者数は毎月のように変わっている。

「平成 16 年 6 月から 10 月現在までの間で、11 名の編入があった。復学してきた子もいる。」(小学校)

「現在（平成 17 年 1 月）、日本語学級在籍は 9 名。去年あたりから出入りが激しい、延べ 20 数人。2 学期 4 人入って、二人止めた」(中学校)

転出転入が多いと、一人一人の児童生徒の成長を時間をかけて見守ることができない。教員の努力が結実する前に生徒はいなくなり、また新しい生徒が入ってくる。虚しさが残る。子どもが転出する理由は、親の仕事が変わったための引越し、帰国、退学である。親は基本的に出嫁ぎに来ているので、条件のよい働き口があれば移動する。景気の動向を一番に受け、リストラの対象にもなりやすい。連絡もなく突然学校を止めたり、転居先が不明の子もいる。

5. 児童生徒の日本の滞在期間はどのくらいですか？

①再入国の経験あり 30 人

②再入国の経験なし 161 人

②のなかで

・日本生まれ日本育ち 60 人

・5 年以上日本に滞在 46 人

・3～5 年未満 30 人

・1～3 年未満 30 人

・1 年未満 16 人

③無回答・分からない 17 人

1) 日本生まれ日本育ちの子どもたち

今回のアンケート調査の中で、もっとも衝撃的だったのがこの回答である。日本生まれ日

本育ちの子どもたちが日本語学級に 60 人もいる。日本生まれでありながら小学 6 年でまだ日本教室に在籍している例もある。学校によっては、全員が日本生まれ日本育ちという学校もある。5 年以上日本に滞在している子どもも 46 人と多い。

今回のアンケート結果だけを見ると、日本生まれのグループが一番多く、次に多いのが 5 年以上日本に滞在しているグループである。5 年以上を一つのグループにしたのは、学習言語の習得には、5 年から 7 年程度かかる、という定説によるものである¹⁵。5 年以上日本に滞在していれば、そろそろ日本語学級を卒業し、原学級のみで授業を受けてもよい時期であるのに、これだけ多くの子どもたちがまだ日本語教室に在籍しているというのは驚きである。

筆者は今まで、年少時から日本にいれば、日本語能力に関しては日本人の子どもと遜色がなく、むしろ懸念すべきは母語を失う危険性である、と単純に理解していた。もちろん、普通学級にいて日本語での学習に困難を感じない子も大勢いる。

「外国籍 24 人中日本語教室は 9 人。他の 15 人は普通学級にいる。まったく普通の日本人と同じ。小学校低学年や小さいときから日本にいる。」(中学校)

現場の教師は、日本生まれであっても必ずしも日本語の能力が高くないことをよく認識している。

「15 年前に入管法が改正されたときに青年だった人たちが結婚して子どもが生まれる。(仮に)日本の幼稚園に通ったとしても、日本人の子と比べると生活体験が希薄で、日本人との接触も少ない。母語自体にも問題がある。親からのことばかけが少ない。母語の情報量が少ない。母親が働いているケースも多い。今後、こうした日本生まれ日本育ちでありながら、日本語ができない、(母語も不十分)というケースが増える可能性がある。」(小学校)

「日本生まれや就学前教育(幼稚園・保育園など)を日本で受けている児童は生活に必要な日本語はすぐ覚えるが、学習に必要な日本語はなかなか身につかない。会話ができて、語彙が日本人児童に比べ圧倒的に少ない。日本語の獲得と同時に今度は母語の喪失、親子で会話ができない状況も心配される。」¹⁶

「日本生まれ日本育ちで日本語学級にいる子供がかなりいる。もともと能力的に劣っている可能性がある。本来ならば、特別学級に行くべき子もいる。」(小学校)

夫婦そろって長時間労働をしている日系人の両親は、子どもを日系人が運営している託児所に預けることが多い。早朝から夜 9 時 10 時まで預ける場合もある。託児所は過密状態であり、ケアが充分に行き届かない¹⁷。こうなると日本生まれでありながら、日本語はほど

15

16 黒須陽子, 2003

17 宮島・大田, 2005, 55-56 ページ。筆者の訪問した二つのブラジル人学校も託児所を併設していた。一方はもともと託児所だったのが、子どもの成長とともに学校に発展したものである。双方の学校ともブラ

んど使えない。母語による語りかけも少なく母語能力も低い、ということが起こりうる。

バイリンガル教育の土台となるのは母語の能力である。母語の能力を土台にして、第二言語が獲得されていく。母語能力が不完全であると、第二言語の能力もまた伸びていかない。幼児の時期では家庭における言語環境が決定的に重要である。この時期に母語による接触（語りかけや読み聞かせなど）が充分に行われないと、その後の第二言語（この場合には日本語）の獲得にも支障をきたす¹⁸。同じバイリンガルとはいっても、ここには、エリート社員や研究者の海外子女教育におけるバイリンガル問題とは決定的に違う、親が出稼ぎに来ている子どもたちの言語教育問題がある。

何年も日本語学級に通っている児童は、そもそも母語の確立自体が遅れている可能性がある。母語、日本語のどちらも（年齢相当の）第一言語として確立しておらず¹⁹、言語能力、ひいては認知能力自体が十分に発達していない可能性がある。中学生になっても、日本語が理解できず、しかも母語は話せるが読めない、という極端な例もある。

「親が日本語が話せず、しかも子どもに母国語の読み書きも教えていないため、会話程度しかできないのです。したがって、ポルトガル語訳やスペイン語訳、また辞書やローマ字さえ使用不可で教材がありません」（アンケート）

小学校に入っても、南米系の親は日本語能力が低いことが多く、子どもの勉強を見てやることができない。朝早くから遅くまで働き、子どもと接触する時間が少ないため、母語での会話も少なくなりがちである。子どもは家でテレビを見て過ごす。スペイン語やポルトガル語の番組も放映される。家庭では母国のみの会話になるので、長期休暇の後、日本語能力が後退する。

「家ではスペイン語(を話す)。スペイン語のテレビを見ている。テレビの影響はすごい。」

「現在、新学期（2学期）の不適応が最大。夏休みの間にそれまでの蓄積が全部壊れてしまう。」

2) 滞在期間の長期化（定住化）傾向

南米日系人の親自身は「出稼ぎ」が目的で来日している。目標を達成できれば帰国したいという願望を持っている。しかし、実際には昨今の不況のためなかなか目標が達成できず、滞在がずるずると長期化する傾向がある。また、帰国しても、本国の経済社会状態が悪い、思うような職に再就職できない、などの理由で再来日するケースも非常に多い。

将来のプランが明確ではない中途半端な状態は、子どもの学校での勉強の姿勢を消極的なものにする。いずれ帰国するのだから、日本語の勉強は役に立たない、と親も子も考え、覚悟を決めて日本での勉強に取り組むことができない。子どもの言語の能力(母語)の発達には年齢が非常に大きなファクターであり、適切な時期を逃してしまうと、あとから補うの

ジル政府から正式の学校と認められている。●

¹⁸ 中島和子，1998

¹⁹ セミリンガル，ダブルリミテッドバイリンガル，などと言われる。

は至難の業である。子どもの成長は待ったなしである。

6. 主な指導内容はどんなことですか？

- | | |
|------------------------------------|-----|
| ①日本語指導が主 | 37人 |
| ②日本語指導と教科補充 | 89人 |
| ③教科補充が主 | 72人 |
| ④日本語・教科指導よりも、むしろ生活指導が必要（学校に来させる、等） | 9人 |

長期滞在に伴って、指導の内容が日本語の初期指導から、中期指導・移行期指導に重点が移ってきている。初期指導は比較的容易であるし、内容的にもほぼ一律でありばらつきがない。初期指導用の日本語の教材もかなり揃ってきている。担当者手作りのものもある。しかし、中期・移行期指導のための教材はほとんどない。教授法も確立されていない²⁰。研修の機会もほとんどなく、教員は手探り状態で模索を続けている。

日本語の初期指導がある程度終わると（あるいは、日本語指導と平行して）、教科補充の指導が行われる。子どもの滞在期間が長期化するにしたがって、日本語教室は日本語そのものの指導以上に、教科補充教育が重要な柱となってきた。

これは、生活言語と学習言語の習得にかかる時間の差に起因している。対人コミュニケーションに必要な生活言語能力は1～2年で習得可能であるが、教室に必要な思考・認知発達を促す学習言語能力は、習得に5～7年（あるいはそれ以上）かかるとされる。「9歳の壁」を指摘する声も多い。小学校3、4年生あたりから、抽象的、認知的思考を要求する語彙が増える。学習言語の習得に難がある外国人児童は学年が上がるにつれて次第に授業についていけなくなる。教師や友達とは不自由なく日本語を話しているように見える子どもたちも、いったん教室に入ると、日本人の子どもたちとの差は歴然としてくる。中学校になると、その差は絶望的になる。

「当該学年の学習進度についていける子は、約半数」（小学校）

「授業についていける子でも、下の中というところか？ 教室に行くと非常に静かにしている。」（小学校）

「低学年はうまくいけば、在籍学級で日本人の子どもたちと問題なく学習していける児童もいる。しかし、日本語指導教室に通わなくても大丈夫だった子も5年生頃から学習の遅れを感じ始め、6年生ではついていくことがやっと、という状態になってしまう児童がほとんど。」²¹

「中学校で日本語教室の子どもを普通学級に戻すことは不可能」（中学校）

²⁰ 最近「JSLカリキュラム」が、移行期の教育法として提唱されたが、現場で採用されているのは一部である。「JSLカリキュラムは難しい。勉強する時間、教材を作る時間がない。」という小学校教員の声も聞かれた。

²¹ 黒須陽子，平成15年。

特に補充を必要としている教科は国語と数学である。これは、他の教科が補充を必要としないという意味ではない。特に、漢字が多く歴史文化的な背景を必要とする社会（歴史）は、外国人の子どもにとって、補充が不可能なくらい難解である²²。社会の授業時間に子供を取り出して、日本語の指導に当てる教員は多い²³。

「教科補充は漢字と計算。ジレンマを感じる。こんなことをやって意味があるのだろうか。コミュニケーションのための時間でもある。（だから）時間が足りない。取り出してあげればいいが、そうするとクラスの授業が全然できなくなる。5、6年生には社会は捨てさせる。全部(全学年)補充に回したことがあるが、そうすると社会はゼロになる。担任が目をかけてくれるとなんとかなる。（算数は）掛け算が抜けると全部抜けてしまう。」（小学校）

「取り出し(授業)で重点を置いていることは読み書き。文章を読み込む。基礎学力が不足している。以前は九九や漢字をやっていた。何度も復習するとイヤになってしまう。今は文章の読み込みが主。子どもや先生の希望で算数をやることもある。」（小学校）

しかし、日本語指導そのものよりも教科補充に指導の重点が移ってくると、日本語教室のありかた自体が問われることにもなる。

「日本語指導よりも教科補充が多く、学力不振の援助ならば本来は日本語教室でなく、学力支援の方でやるべきだと考えられる」（アンケート）

外国人であるがゆえに、取り出しで特別授業が受けられる。日本人児童であれば、学力不振であっても特別授業は受けられない。そのことに対して同僚の教師からも疑問が寄せられる。

「日本人にも同じような（能力的に劣っている）子は大勢いる。外国人は優遇されている、という見方もある。分からないことがあると、日本語学級で一对一で教えてもらえる。日本人は分からないことがあっても特別な授業はしてもらえない。」

6. 中学校が抱える問題

中学校の抱える問題は深く重い。小学校に比べると年齢が上がるだけ、問題が複雑になり解決が困難になっている。生活指導まで踏み込もうとすると、場合によっては体を張らなくてはならない場合もある。

1) 不就学・中退・不登校²⁴

²²宮島(2003)は、今まで自明視されてきた「日本国民」のための教育を外国人の子どもにそのまま適応することの適否を問う。特に、翻訳不可能な漢字歴史文化語（鎖国、蘭学、維新、攘夷、など）で埋め尽くされている歴史教科書を取り上げ、次のように問う。たとえば、「幕府」を翻訳可能な語「政府」に置き換えることはできないのか。「日本的モノカルチャー」の中でしか意味を成さない固有の漢語群を、ひたすら努力を強いることで克服させようとすることは正当なのか。

²³ ある小学校では、6年生の社会（歴史）を通訳を介して母語での指導を試みている。

²⁴ 不就学・不登校は、中学のみの問題ではないが、ここで取り上げる。小学校よりも中学校のほうが不就

学齢期にありながら、学校に通っていない多数の子どもたちの存在が社会問題になりつつある。「2004年3月10日、外務省が主催した在日ブラジル人の教育問題に関するシンポジウムによると、就学年齢にあるブラジル人の子ども約5万人のうち、学校生活に適應できないなどの理由で不就学になっている子どもは推定約15000人いるという。²⁵⁾ 不就学問題が起きるのは、日本では、外国籍の子どもの就学は義務ではなく、申し出によって許可する形式をとっているからである。義務教育は日本人にのみ適應される。

中学校に入ると、教科内容は一段と難しくなり、定期テストもある。外国人の子どもにとって授業についていくのは、並大抵のことではない。小学校では日本語学級があっても、進学先の中学校に日本語学級があるとは限らない。中学に入ってから不登校や中退に陥る生徒は多い。ブラジルでは日本の中学2年生までが義務教育なので、そこで止めてしまうこともある。15歳（中学3年時）で来日すると、中学校側が編入にいい顔をしないこともある。

「止める理由は、帰国。ただ止める。転学。他の中学校から転校する子はあまりいない。」(中学)

「進学先の中学校に日本語学級がない。がんばっていることが次に繋がらない。明るい未来に繋がらないのが一番のストレス。中学校に行っても未就学になったり、不登校になったりする。」(小学校)

「5、6年生で入ってくる子が多い。中学校へ行ったときが心配。中学校の受験体制についていけない。去年は中学で二人退学、その前の年は一人退学。今年(2005年)、進学説明会をした。」

「中学校では定期試験がある。国語だと10～15点しかとれない。記号で選ぶ問題だけ。中国籍の子だと50～60点。英語や数学は満点の子もいる。中国籍の子は公立高校へ進学する。南米の子は私立へ行く。でも中退する子が多い。」

出席状況を尋ねたアンケートによると、小学生に比べて中学生の出席率が極めて低い。小学校では、(把握している児童の中で)約95%の児童が「ほぼ休まず授業に出ている」が、中学校になると、その率が6割になる。

「この時間4人が来るはずなのにまだ来ていない。家にいる。休みが多い。(4人のうち)二人は3年生。一人は11月まったく来ていない。12月少し来るようになった」「日本語学級と本学級とで所在が掴めないこともある。フケてしまうこともある。三年生はこの時期(1月末)自習が多いので。」(中学校)

中退したあとの子どもたちはどうしているのだろうか。

「(中退した子どもは)仲間同士で遊んでいる。親のすねかじり。盗み、セックスとドラッグ。」

学、不登校に陥る生徒は多い。

²⁵⁾ 2004年1月17日付毎日新聞静岡版(ななころびやおき, 2005, 145ページより転記)

働いている子もいる。当市は15歳を基準に労働を認める。それ以下でも禁止ではない。」(中学校)

外国人問題に詳しい弁護士は次のように述べている。

「不就学がきっかけで非行から犯罪に走り、強制送還で家族と離れて生活の基盤がない本国に追いやられる南米出身者はおおぜいいる。」「ことばのわからないことからくるいじめ、成績低迷、不登校、少年院、不安定な仕事、刑務所、と彼らの20年そこそこの生活歴に記された悲惨な軌跡は、日本社会の『外国人受け入れ』を映す鏡だ。」²⁶

外国人児童生徒の不就学問題には行政側の不備もある。外国人登録をした児童に対しては、入学の前年度に就学案内が送られるのだが、すべて日本語で書かれているため、日本語能力の低い保護者には理解できない。

小山市ではこれまで、学齢期の子供がいる保護者が市民課で外国人登録や住民登録をする際、義務教育課に行くように指導してこなかった。現在、市教委では、「外国人のための就学ガイド」をポルトガル語、スペイン語、英語で作成中である。また、市民課に子どもの就学を促すパンフレットを置く予定である。登録をする際に、就学手続きも同時にしてもらおうという趣旨である。この措置がうまく稼動すれば、日本語能力に欠けるこどもたちが今まで以上に各小中学校に入学(編入)してくることになる。その数がどの程度になるかは予想がつかない。市として、外国人児童生徒が増えた場合の対応は今から十分に考慮してほしい、という強い要望が教師側から出されている。

2) 中学三年生を担当の先生方にお聞きします。卒業後の進路はどのようなものですか？

進学	2人
就職	2人
帰国	0人
未定・その他	5人

卒業予定者9人のうち、2月中旬時点で進路未定が5人もいる。この中には、学校にほとんど来ていない数人も含まれる。帰国予定者は一人もいない。滞在は長期化している。

進学予定者が二人いる。日本語教室在籍者が高校に進学することは至難の業である。

「中学校で日本語教室にいる子が高校に進学することは極めて難しい。昔、私立高校に進学した子がいた。ものすごく勉強した。外国人特別枠で公立高校に入った子もいるが、特別なケース。(外国籍の子でも)普通学級にいる子は全員進学する。」(中学校)

「運がよければ高校にいけるかもしれない。可能性があるのは定時制高校。親の関心はマチマチ。危機意識が強くなりすぎる場合もある。」(小学校)

²⁶ ななころびやおき, 2005, 156 ページ。

「ほとんどの教科を日本語教室で勉強しているため、きちんと成績が出せないの、進学は非常に難しい状況」(中学校)

「中1の段階で高校に入りたいと言っていた子が途中で進学をあきらめる。」(中学校)

公立高校には、帰国子女に対する特別措置がある。本来帰国子女のための制度であるが、外国籍の生徒にも適用される。条件は、入国後3年以内であり、かつ、高校入学後には援助無しですべての授業を受けられること、となっている。

ある中学校の教員が、高校入試の特別措置に関して、メーリングリスト²⁷に次のように書いている。

『「入国3年以内」がかなりネックとなっていて、その後高校で普通の授業を受けると言うのだから、かなり酷な話には聞こえますが、本人がそれくらいの厳しい感覚を持っていないとやっていけないという現実も感じます。現在 J 高校の3年生になるブラジル人生徒がいます。中学3年時には上記の入試のための作文指導を毎日泣きながら歯を食いしばって受けていた姿を思い出します。』

経済的な理由でどうしても私立高校は無理だという子どももいる。しかし、日本人ならばほぼ全員（普通学級で学ぶ外国人生もほぼ全員）が進学する高校に入学しなければ、日本での将来の展望は開けない。来日わずか三年以内（小学校時点での来日は不可）で、非漢字圏の生徒が、特別枠(作文と面接)とはいえ、受験を突破し、高校の授業をすべて日本語で理解することを求められる。「泣きながら勉強させた」という上記教員のことばが重い。

7. 日本語学級の児童生徒について

1) きちんと学校に来ていますか？

①ほぼ休まず来ている.	294人
②それ以外	
・平均して週に1回～2回欠席	12人
・半分以上欠席	1人
・最近一ヶ月以上ほとんどまったく来ない	2人

子供たちは思った以上によく学校に来ているようだ。特に小学校の子供たちの出席率は高い。ただ、「ほぼ休まず」ということばを教員がどう解釈したかは不明である。学校訪問をしたときに、来るはずだった子どもが来なかったことが何度かあった。設問の仕方を間違えたかと反省した。

2) 休み時間の様子はいかがですか？ 原学級に溶け込めていますか？

²⁷2005年3月末、2004年度の内地留学生と協力し、栃木県の日本語教室担当者を主なメンバーとしたメーリングリスト RENET を立ち上げた。

- | | |
|------------------------------|------|
| ①主にクラスの友達（日本人）と一緒にいる. | 182人 |
| ②だいたい一人でいるか、日本語学級の友達という. | 54人 |
| ③よく分からない(学校に来ないので分からない場合も含む) | 2人 |

約8割の子どもたちは、現学級のクラスに溶け込んでいるようである。むしろ、外国人として扱われることに拒否反応を示すこともある。

「まあまあうまくいっている。自己主張が強いので、多少の摩擦はあるが。」(小学校)

「新しくきた子の面倒をみてもらいたいと思うが、それを嫌がる子もいる。もう日本語もうまくなったのに、もうスペイン語なんか使いたくない、と思う子もいる。(スペイン語が)分からない振りをすることもある。」(小学校)

3) 児童生徒の家庭の状況はどのようなものですか？

- | | |
|-----------------------|-------|
| ①両親と同居し、両親ともに実の親である家庭 | 159家庭 |
| ②それ以外の家庭 | 43家庭 |
| ③はっきり把握していない家庭 | 1家庭 |

(在籍児童の数が多く、家庭の状況を把握しきれていない学校は未回答であった。)

43家庭で実の両親が揃っていない。これは、全体の2割に相当し、かなり高い数値である。祖父母と同居している子供もいる。その場合は日本語の習得が早い。日本語以上に、家庭がかかえる問題の方が大きい場合も少なくない。ある教員は「問題をかかえていない子どもはいない」と明言していた。

外国人児童生徒の多い地区は、往々にして日本人の家庭でも同様の問題を抱えている。

「日本人の子供も多くの問題を抱えている。離婚家庭が多い。こどもが素直じゃない。すれている。」

「この学校は日本人の子も大変。(学力の)レベルの低い子のほうが多い。もちろん高い子もいるが……。つまらないことで親からの苦情も多い。市の中でも比較的問題が多い方だと思う。」

「(外国人の家庭は)所得が低い家庭の子が多い。集金が滞る。日本人家庭も同様。お金が入ると消費してしまう傾向がある。不況の影響で仕事が少なくなった。失業の危険がある。」

日本語教室に対する周囲の無関心を嘆く担当者もいる。その根底には、「日本人生徒にも問題があるのに、就学義務のない外国人にまで多大の労力を投入できない、という意識が働いているのではないか」という指摘もあった。

4) 文化的適応

日本と南米では学校文化のありようが大きく違う。そのため、南米から来た子どもたちが日本の学校にうまく適応できなかつたり、教師の側から否定的な評価を受けることがある。

学校には休まず登校する、宿題は必ずやってくる、掃除や給食などの当番をさぼってはいけない、運動会では力を合わせて競争に勝つ、進学に備えて勉強をがんばる、など、日本では暗黙の了解とされている学校文化を彼らは共有していない²⁸。南米の子どもや親にとっては、学校を一定数休むのは悪いことではない。掃除や給食、運動会などの行動様式には馴染みがない。運動会、マラソン大会、遠足、合唱コンクール、など、団体行動や集団訓練を要求される行事は特に苦手である。「運動会の練習で日本の学校がイヤになってしまう」という指摘は多い。

人間関係でも誤解を生む。ことばが不自由なことに加えて、自己表現の仕方が違うからである。自分の感情をストレートに表現するため、日本人から見ると乱暴でわがままに映る。叱られ方、謝り方も日本と異なり、誤解を生みやすい。

日本では、目上の者に注意されたり叱られたりした場合、うつむく(目を伏せる)のが通例である。これは素直な態度、恭順の意を示していると解釈される。顔をあげて相手の目をじっと見るというのは、反抗的で生意気だと解釈される恐れがある。しかし、南米から来た子どもたちにとっては、相手の目をじっと見るということは、相手のいうことを聞いている、耳を傾けている、ということの表現である。スペインの日本人学校に赴任した教員が、子どもたちが叱られている時にも教師の目を見ているので、最初は生意気な子どもたちだと思った、という。

また、謝ることは、すぐに「ごめんなさい」と言うことではない。友達と言い争いになったり、教師から注意されたりした場合、日本的な感覚からいえば、ゴチャゴチャと言い訳をせず、すぐに「ごめんなさい」ということは潔く好ましい態度に映る。しかし、彼らにとって、すぐに謝る（「ごめんなさい」と言う）事は、かえって相手を怒らせることもあるという。相手と真剣に向き合っていない、と受け取られる可能性がある。

『ブラジルでは、まちがったことをしてもかんたんに「ごめんなさい」とはいわない。自分のあやまちをみとめるようなこともしない。「ごめんなさい」というかわりに、ありったけのいいわけをする。

だからといって、ブラジル人が、反省をしていないかという、そういうことではない。せめる方は、相手のおかしたあやまちにたいして、せいっぱいの抗議をつぎからつぎにまくしたてる。そして、その抗議に、しかられる方も、つぎからつぎにいいわけをならべる。

こうしながら相手にいいたいことを全部、はきださせてやるのである。このやり方だと、おこっている人は、納得のいくまでおこることができる。相手をゆるしてやろうと思うまで、おこることができる。これがブラジル式の謝り方なのだ』²⁹

²⁸ 今津, 2002

²⁹ 高橋幸春, 1995, 98-99 ページ。ブラジルから来た女の子パウラが日本で経験する様々なできごと。外国人の子どもにかかわりのある教員や日本の子供たちにもぜひ読んでもらいたい本である。

8. 保護者について

子供の教育に対する熱意や学校への理解度は保護者によってまちまちである。日系人の母親は教育に対して熱心な場合が多いという指摘もある³⁰。ブラジル日系人の勤勉さと大学進学率の高さは母国でも有名である。全人口の1%しかいない日系人がリオ大学に占める割合は15%とも聞く³¹。しかし、一方で、少数ながら非識字者の親もいる。いずれ、母国に帰る予定だからと子供の日本での教育に無関心な保護者もいる。

「対訳の文書を読めない親がいる。少数であるが、それを知ったときものすごいショックだった。」

「(困っていることは) 保護者の子供に対するしつけ等のアバウトさ」(アンケート)

1) 保護者との連絡はうまくいっていますか？

- | | |
|---------|------|
| ①問題がない. | 149人 |
| ②問題がある. | 55人 |

2) 給食費、その他諸費用の支払いはスムーズですか？

- | | |
|----------------|------|
| ①ほぼ期限通り払っている. | 183人 |
| ②期限を過ぎるが払っている. | 47人 |
| ③滞っている. | 12人 |
| ④支払いを免除されている. | 3人 |

4分の3の家庭とは連絡がうまくいっている。集金もほぼ期限通り支払われ、問題がない。学校文書やお知らせは、母語に翻訳したり、漢字にルビを振るなど工夫している担当者もいる。一方、4分の1強の家庭とは連絡がうまくいっていない。ことばが障害になって連絡がうまくいかない、家にいないので連絡がなかなか取れない、学校に対して協力的ではない、などの理由による。

「保護者向けの外国語通知文作成には、大変苦勞している。まして、外国語で内容を話すことは不可能である。」(アンケート)

「夜間外出は止めてほしいという、親が許可しているのだからいいだろう、といわれてしまう。中学校の例。一部の親ではあるが……」

南米出身の親は日本語が不自由なことが多い。職場や地域でのセグリゲート化が進み、ほとんど日本語を使わずに生活できる環境が整いつつある³²。日本での滞在期間が伸びても

³⁰ 黒須, 2003

³¹ ●

³² 小内透, 2003, 13 ページ

日本語能力が伸びるわけではない。日本語ができるようになった子どもを通訳として頼り、市役所や病院に行く際に学校を休ませることもある。

親は残業で帰りが遅く、子どもとじっくり向きあう時間がない。お金を稼ぐことが第一の目的なので、子どもの教育が後手に回りがちである。一方、学校に行っている子どもは毎日日本語のシャワーを浴び、滞在が長引くにつれ、日本語が優位になり、母語を忘れていく。アイデンティティの揺らぎ・喪失、親子間のコミュニケーションの不成立といった深刻な事態も起こる。

「家庭内で(親と)ことばが通じない生徒もいる。母語保持の指導は(学校では)できない。」

「日本語しか話せない児童と母語しか話せない親。家庭内でコミュニケーションが取れないケースもある。」³³

「母語も日本語もきちんと話せなくなる心配がある。(家庭での言語環境の問題)」³⁴

9. 担当者自身について

1) 日本語教室の担当になって、通算何年目ですか？

1年目	7名	2年目	7名
3年目	5名	4年目	1名
5年目	2名	6年目	1名
7年目	3名		

1, 2年目が14人, 3年以上が13人。5年以上のベテランも6人いる。かつての調査と比較して、日本語教育担当に関わる期間が長くなっている³⁵。しかし、学校によっては、担当者が1, 2年で交代するケースもある。

「(困っていることは)当校では毎年日本語教室担当者が変わり、しかも引継ぎがうまくいかず(異動などでいない)0(ゼロ)から手探りではじめている点」(アンケート)

2) 日本語学級担任を自分から希望しましたか？³⁶

はい: 13 いいえ: 17³⁷

3) 今後も日本語学級の担任を続けたいと思いますか？

³³ 齊藤, 長谷川, 亀山, 2005

³⁴ 同上

³⁵ 1999年の調査では、回答のあった23人のうち、1年目が一番多く9人、次に多いのが2年目で6人、3年以上は4人しかいなかった。

³⁶ 前回の調査では、自分から希望したと回答した教員はわずか4名、「いいえ」が19名であった。

³⁷ 日本語教室担当になった経由にはいろいろある。産休に入る教員を日本語教室担当にしたり、小さい子供を抱えて休みがちな教員を担当に回すこともある。

はい : 15 いいえ : 9
どちらともいえない・無回答 : 5

4) 外国人児童生徒の母語の知識がありますか？

はい : 15 (スペイン語 7名, ポルトガル語 10名, 英語 4名, 中国語 2名. 複数回答)
いいえ : 9

自分から日本語教室担当を希望した教員は, 今後も続けたいと希望する傾向が非常に強い.
今後も担当を続けたい理由としては以下のようなものが挙げられた.

「外国人児童との出会いをきっかけに, 英語以外の外国語に関心を持つことができたことと, 児童や保護者からも, たくさんのことを学ぶことができるから.」

「一年かけてやっと子どもたちの理解度が分かり, 使用テキストも決定したので毎年担当者が変わると, こどもたちへの理解不足からきちんとした指導がされにくいと思うから.」

担当を続けたくない理由としては, 以下のようなものが挙げられた.

「できれば詳しく取り組むこともよいのだけれど, 自分自身独善的になり, 周囲へ啓発して後継者を育てたりできない. 長期的に見ると非常に専門的で限られた範囲でのことでこの職務についているのは, 自他ともにマイナス面が多くなると思うから.」

「他の仕事が多くて専任できない. 外国人児童の数が少ない.」

どちらとも言えない, あるいは, 回答なしが5つあった. 以下の回答は担当者の揺れる心のうちをよく表している.

「現在の学校には, 先生方の理解や保護者, 通訳の方々との連携がとれているので続けていきたいという気持ちはありますが, それはあくまでも, 他校とくらべてのことです. 今日までの日々, 多くのストレスがありました. 一番つらかったのは, 相談する相手がいないということです. 子どもたちはとてもなついていて, かわいいのですが…….」

10. 学内のネットワークについて

1) 原学級担任との情報交換はどのようにしていますか？ (方法, 頻度, 定期的かどうか)

定期的, ノート・記録など文字で, 頻繁 : 13
不定期, 口頭のみ : 12

2) 原学級担任以外との情報交換の場はありますか？

はい : 14 いいえ : 14

3) 学校の雰囲気として, 日本語学級のあり方に関心を持ってくれていると感じますか？

(自由にお書きください)

肯定的：10

否定的：8

どちらでもない・条件付き：5

未記入：2

外国人児童が多く在籍している学校の場合には学校全体としての関心も高く、日本語学級への理解もある³⁸。しかし、在籍者が少なかったり、日本語がある程度話せる児童ばかりの学校では、日本語学級への関心が薄い。

「日本語教室は『楽』と思われているように感じます。教室も何かと使われます。」(アンケート)

「ヒマだと思われているようで、いろいろな仕事がまわってくる。雑用係りのようになってしまっている。」(アンケート)

管理職の姿勢にも左右される。

「特に校長の姿勢が大切。我が校長はとてもよく理解してくれている」(小学校)

日本語学級担任の悩みの一つは、学内に相談者がいないことである。日本語学級担任は学校に一人しかいない場合が多いので、悩みや問題を共有できる相手がない。孤立感を抱くこともある。

「相談相手が少ないこと。(年3回の研修だけではどうにもならない)」(アンケート)

「学校に担当が一人しかいないので、困ったときにすぐに相談できる人が校内にいない。」「カリキュラム組み方、指導方法などが本当に児童にとって適切なものになっているのかどうか不安になることがある。」(アンケート)

また、小学校の場合は、子どもが在籍する現学級担任との関係に非常に気を遣う。

「(所属)教室が一番、担任の先生が一番、担任の先生の言う通りにしなさい、と子どもにいつも言っている。親にも、子どもの学級に関わることは担任を通していってくださるように言っている。」

「担任とのパイプ役。文化的な摩擦があって、(子どものことを)理解してもらえないこともある。そのために先生方との関係は良くしておく必要がある」

日本語学級の実情を知らない他の教員からの何気ない一言に傷つくこともある。

「外国人だからできなくてもしょうがない、というような発言にものすごく傷つく。気楽な気持

³⁸ ある小学校には「国際交流委員会」というPTA組織がある。外国人保護者と日本人保護者の交流を図る目的で設置された。茶話会、日本語教室の遠足の引率補助、行事のサポート(折り紙を教える、七夕の竹を用意する、等)をする。ホーステイの受け入れなど外国人児童との交流もある。

ちでそういうことを言う先生がいる。ああ、あの人はあんな風に思っているんだ、と感じてしまう。自分が努力していることが評価されていない（ように感じる）」

「手紙（返事）を持ってこない、などという先生方の会話を聞くとますます追い詰められる。」

孤立するのは、自分にも責任があるという発言もあった。

「孤立する理由。自分にも責任がある。発信すべきことは自分から発信する。他の先生方との関係は難しい。」「(担当して) 最初の年の 5 月、子どもが来ない。“忘れていた”といわれた。格下に見られている、という意識があった。そういう意識をもたれないようにするのもあなたの役目と校長に言われた。内留に行ったことが足がかりとなった。まわりの評価ばかり気にしていた。」

次の発言は、日本語教室という特殊なクラスを担当している教員の微妙な立場をよく表している。

「最初はだれでもできると軽く思われていた。やればやっただ、今度はだれが後を引き受けられるのか、と言われる。大変だ、大変だ、という引き受け手がなくなる。」

11. 他校とのネットワークについて

他校の日本語学級担当者との交流はありますか？（会合、研修会など）

交流がある：真岡市、小山市、佐野市、那須塩原地区

会議（研修会）に参加するのは、日本語教室担当者、補助教員、市教育委員会の担当者、等である。校長が参加する市もある。開催回数は、年 2 回から年 5 回程度。佐野市内の 5 校では、年 2 回、日本語教室校外学習を開催している。現学級担当者も参加できる。

宇都宮市と足利市にネットワークがない。栃木県で外国籍の子が一番多いのは宇都宮市である。ただし、域内が広く子どもの数が分散されているので、特定の小中学校に子どもが集中していない。町立や栃木市のように地区に一つという学校のネットワーク作りをどうするか、という問題もある。他校とのネットワークがないと、担当者が孤立したり、情報が不足する。「指導方法が独善的になる」との自省もあった。

IV. ある日の日本語学級

筆者は 2004 年から 2005 年にかけて 11 の日本語学級（小学校 9、中学校 2）、2 つのブラジル人学校を訪問した。その中から、特徴的だった 4 つの日本語学級の様子を紹介する。日本語学級の様子は日々変化する。同じ教室でもいつも同じ状態ではない。

1. S 小学校（2005 年 1 月 28 日）

担当者は着任 2 年目。週 1 回日本語指導員が来る。

すぐそばに大規模な工業団地がある。学校の窓からアパート群が見える。そこから通学してくる児童が多い。

この日は4人の子どもたちが日本語教室に来ていた。

A子(10歳)とB男(12歳)は兄妹。ペルー国籍。父とそのパートナーの女性と暮らしている。家は中学生らの溜まり場になっているらしい。先日、A子が友達を無断で家に泊めて騒ぎになったことがあった。保護者は、無断外泊が悪いと思っても、日本語ができないので、対応が分からなかったようだ。

A子は三年生の算数の勉強をしていた。本当は英語の授業なのだが、日本語学級に来ていた。予定外である。クラスにうまく馴染めないため、しょっちゅう日本語学級に来ている。乱暴、口が悪い、などの理由でなかなか友達ができない。日本生まれ。スペイン語は話せるが読めない。

B男は6年生の算数の勉強をしていた。分数を少数に直す、四捨五入の勉強。非常におとなしい。彼が来年進学する中学校には日本語学級がない。普通学級で勉強についていくのは能力的に困難だろう。イジメにあわないだろうか、心配。

C子(9歳)は、日本生まれただが、その後ペルーに戻り、小学1年生でまた来日。両親ともペルー人。兄と弟(7ヶ月)がいる。兄弟三人全部父親が違う。現在は弟の父親と自分の母と暮らしている。母親は教育に関心があり、他の学区だが当小学校に通わせている。母親はスペイン語しかできないので、どうしよう、どうしよう、とは言うが、自分では日本語を教えられない。C子はほとんど話さない。うなずくか、首を振るかのみ。話すときも、声が小さくよく聞き取れない。話す相手はA子くらい。スペイン語と日本語で話す。他の子がいると話さないが、一人だと話すらしい。不登校気味で、週2~3回休む。単に行きたくないから休む。赤ちゃんの面倒をみるために休むこともある。

6年生のD子は4年生までおばあさんとフィリピンにいた。保護者はフィリピン人とペルー人。また5月にフィリピンに帰るので、現在は英語の勉強をしている。将来はスチュワーデスになりたい。英語の絵本をじょうずに読んでいた。タガログ語が一番じょうずだと言う。

教員一人が4人に対応している。学年も能力も教材も違うので、集団での指導ができない。教員が一人の子どもの指導をしていると、後の三人は手が空いてしまう。

現時点で、その他6人の児童が在籍している。ただし、来週二人の転入生(2年生と5年生)が来るので、在籍数が12になる予定。

5、6年生の姉妹。幼稚園のころ母親に恋人ができて家を出て行った。虐待された経験があるらしい。心にキズを抱えていて、そのためか、なにかあると固まって動かなくなってしまう。担任が助けを求めて呼びにくる。

ブラジル人の女の子。家に7ヶ月の赤ちゃんがいる。他の家庭の赤ちゃんの面倒を見ることもある。そのため学校を休む。ブラジルに行ったり来たりしている。両親がアルゼンチン人の兄弟3人は問題がない。唯一血がつながった父母を持つ家庭である。

校長は、以前タイの日本人学校にいたことがあり、外国籍の児童に非常に理解がある。教室を訪れて子供たちと親しく話をしていた。

2. D 中学校(2005 年 1 月 24 日訪問)

担当は一人。日本語指導助手二人が週三回半日来てくれる。

この日の授業は 5 人。中学生 2 人 (ブラジル, 中国)。通級の小学生 3 人 (ブラジル二人, タイ)。担当教員と二人の指導助手で指導。中三のブラジル人の子は来なかった。退学を希望しているという。

ブラジルから来た中学 2 年生の少年。『ひろこさんのにほんご 2』の勉強。筆者が持参したハリーポッターのポルトガル語版に狂喜していた。自分のクラスに持って行っていいか、と問い、許可がでると嬉しそうにかばんにしまった。ポルトガル語がスラスラ読めた。担当の先生はポルトガル語が堪能である。E 男にポルトガル語で説明していた。

中国人の少女。彼女は祖父母とペキンにいた。日本に着たばかりである。仙台にいた両親が小山に引っ越してきた。学区内のアパートを借りている。高校入学の特別枠を使って高校に入学したい希望を持っている。おとなしくまじめな子。指導員が一对一で勉強を見ていた。数の言い方の勉強。学校文化が日本と似ていること、同じ漢字文化圏であることにより、中国人の児童生徒は南米の子どもたちに比べると、圧倒的に有利である。

部屋の後ろにはパソコンが置いてある。こどもたちはパソコンが好き。遊び感覚でやりたがる。ブラジルの女の子(小 6)が、やってもいいかと聞く。時間を決めてやらせる。彼女は、ものすごく活発でおしゃべり。授業の邪魔になるほどである。カードゲームをやろうとせがむ。最後に 5 人でカードゲームをした。みんなだんだん本気になってくる。「おに」と読むと、「お」のひらがなと絵の書いてあるカードを取るゲーム。

教師が 3 人、子どもが 5 人で、非常ににぎやかな授業であった。

担当の先生は、日本語教室のほかに、英語の授業も担当し、他の中学校に出張授業にも行く。生徒の家庭も訪問する。

3. M 中学(2005 年 1 月 21 日訪問)

担当の教員は二人。他に、T.T.の教員が二人。通訳の先生 (ポルトガル語) が週に 3 回、計 8 時間来てくれる。親との連絡もお願いしている。

現在、日本語学級在籍は 9 名。去年あたりから出入りが激しい、延べ 20 数人。2 学期 4 人入って、二人止めた。去年から直接入ってくる子が増えた。日本語がまったく分からない。今までは、小学校は日本で過ごす子が多かった。一斉授業は不可能。一人一人のレベルが違いすぎる。全授業開講している。ほとんどの授業は複数で指導に当たる。多い時は 1 授業で子供が 8 人。二学期は 11 名のこともあった。

やる気の問題。何しに来ているんだろう、という子が多い。日本語学級に来る子は多い子で週 10 時間以上。日本語教室に来ると、日本語を話さなくてすむので、まったく話さない子もいる。学校には来たが所在が掴めないこともある。

教室に入るとだれもいない。担当の二人の先生と通訳の先生が手持ち無沙汰に立っていた。この時間 4 人の生徒 (3 年二人, 2 年二人) が来るはずなのにまだ来ていない。家にいる。休みが多い。

次の授業時間になり、子供たちが入ってくる。ブラジル4人、スペイン語話者3人。中1のペルーから来た女子。小3から日本にいる。スペイン語の小学5、6年生向けの本を読んだが非常にたどたどしい。先生は、ダブルリミテッドではないか、という。本人は、将来スチュワーデスになりたい、と言っていた。

クラスの雰囲気がなんとなく暗い。いっしょうけんめい勉強するという雰囲気がない。同じ言葉を話せる仲間がいるというのは、ストレス発散にはいいが、日本語を学ぶモチベーションを大きく低下させる。何時間も日本語学級に来るので飽きてしまう子もいる。先生方も半ばあきらめ気味である。

4. A 小学校 (2005年3月3日)

担当教員は一人。指導助手二人。4月から一年生が増えるので日本語学級が先週移動した。外国人の子供は全クラスにいる。いて当たり前存在。日本語教室の人数はこの時点で30人。しょっちゅう子どもが入れ替わる。漢字を見てくれ、九九を教えてください、という担任の要求でいつも人数は変化している。

5時間目の授業を参観するはずだったが、二人ともお休みだった。いところ同士。一人は風邪、一人は歯が痛いとのこと。

予定していた一人は5年生の男子、9月にペルーから来日。運動会の一週間前に来た。いやいやながら日本に来た。ずっと泣いていた。ペルーに運動会はない。宿泊学習も行かなかった。その間日本語学級にいた。先日の発表会にはがんばって発表した。母語に訳したものがあると察しがいいので、すぐに分かってくれる。すでに学んでいることなので、日本語で復習している感じ。7月にペルーに帰る。一人で帰る。ペルーにはおばあちゃんがいる。もう絶対に日本には戻らないと言っている。本人のためにはそのほうがいいと思う。

もう一人は4年生の女の子。3年生の秋に来日、運動会の後ペルーに帰って、2月14日再来日。日本語をすべて忘れてきた。ペルーにいた間は、学校に行っていない。

今年から入り込み授業を始めた。算数。来年はもっと増やす予定。1～5年生までほとんど入り込んでいる。一人週1～2時間くらい。

こどもは三人くらいまでしか(一度に)入れない。時間割に余裕をもたせる。手の空いた時に入り込み授業が組めるようになった。子供たちの相談室のような感じ。指導半分、お話半分。親はあまり心配していない。こっちだけがものすごく心配している。

教室には、たくさんの引き出しつきのキャビネットが置いてあった。日本語、算数教育に関してモジュール化された自作の教材がぎっしりと詰まっていた。

V. 終わりに

以前と比べて日本語学級のあり方が変わってきている。かつては、日本語が話せない、滞在期間の短い外国人の子供が日本語を学ぶ場であった。こうした子供たちは、数年したら母国に帰る予定であった。日本に残る場合でも、次第に日本語教室に通級する時間数が減り、現学級に完全に戻っていけるものと思われていた。日本語学級は子供が一定期間のみ

在籍する補助教室のはずであった。

しかし、今回行ったアンケート調査と教室訪問を通して、上記の予想が誤りであったことを初めて知った。子供の日本語学級滞在期間は長くなってきている。しかも、それに伴って子供の日本語能力が順調に伸びているわけではない。ここでいう日本語能力とは、教室での学習に必要な認知的言語能力を指す。日本語では抽象概念を表すのに漢字二文字を組み合わせて使う。南米にルーツを持つ子供たちにとっては、漢字と抽象概念という二つの壁が立ちはだかる。しかも、出稼ぎに来ている親は共働きが多く、子供と接する時間が短い。日本語が不自由な場合も多く、子どもの勉強を見てやることができない。幼少時から日本にいる子どもは、母語による語りかけも少なく、第一言語が確立していない場合すらある。

日本語教室の役割が、初期の日本語指導から、教科補充指導や教科につなげるための移行期教育に重点が移ってきている。中期・移行期教育は、教材が少なく教授法も確立されていない。担当者それぞれが不安と疑問をもちながら手探りで指導しているのが実情である。日本語学級で受ける授業時間は、一番多い子で週 10 時間程度である。こうした諸々の制約の中で、外国人の子供たちに身につけさせるべき学力、日本語力とは何であろうか。

外国人の子供たちが置かれる言語(学習)環境は親の都合により様々である。帰国する子、日本に定住する子、帰国する予定であるがその日がいつになるか分からず滞在が長期化している子、母国と日本を行ったり来たりしている子、ブラジル人学校に転校する子、ブラジル人学校から編入してくる子。子供たちが身に付けるべき学力、日本語力も、個々のライフプランによって異なるはずである。問題は、そのライフプランがはっきりしないことである。

明るい兆しもある。外国人教育に理解と情熱、経験を兼ね備えた担当教員が増えていること、行政も動き出していること、拠点校が増えたこと、などは明るい兆候である。文科省も不就学児童生徒の実態調査に乗り出した。全国的に見ると、可児市の不就学児ゼロを目指したユニークな運動、浜松市が市立高等学校にインターナショナルクラスを設置予定であること、など、先駆的な試みが見られる。教材に関しても、浜松市がリオ大学と提携し日本に滞在する子供たちのためにポルトガル語の教科書を作成する予定であること、日系人の労働者を抱える大企業が関係大学に資金援助をしてポルトガル語による教材作成を依頼するなど、ここ数年で、ブラジル日系人子女の教育状況が大きく好転する可能性がある。

引用文献

- 今津・松本編, 2002, 『東海地域の newcomer 外国人学校 増補改訂版』名古屋大学大学院国幸開発研究科・教育発達化学研究科今津ゼミ
- 黒須陽子, 2003, 『平成 15 年度前期中地留学報告書外国語 (ポルトガル語)』
- 小内透, 2003, 『在日ブラジル人の教育と保育』 明石書店
- 斉藤, 長谷川, 亀山, 2005, 『平成 16 年度 後期中地留学報告書 外国語(スペイン語)』

- 佐藤慶子・荻部絵美, 2004, 『平成 16 年度 前期内地留学生研究報告書 外国語 (ポルトガル語)』
- 須藤とみゑ, 2003, 「広島県における異文化背景とする子どもたちの教育の現状」『異文化を背景とする子どもたちへの教育支援に関する研究報告書』広島大学外国人支援研究チーム
- 高橋節子, 2003, 「年少者に対する日本語教育の諸問題—栃木県における事例を中心に—」『白鷗ビジネスレビュー』 Vol.9
- 高橋幸春, 1995, 『パウラちゃんのニッポン日記』 国土社
- 高橋裕一・渡辺恵子, 2004 『平成 15 年度 後期内地留学報告書 外国語 (ポルトガル語)』
- 中島和子, 1998, 『バイリンガル教育の方法』 アルク
- ななころびやおき, 2005, 『ブエノス・ディアス・ニッポン』 ラティーナ
- 川上郁夫, 2005, 「新宿区における日本語教育ボランティア活動と JSL バンドスケールの意義—大久保小学校の調査と実戦を通じて—」『年少者日本語教育実践研究』 No.4, 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 宮島喬, 1993, 『共に生きられる日本へ 外国人施策とその課題』 有斐閣選書
- 宮島, 太田編, 2005, 『外国人の子どもと日本の教育』 東京大学出版会
- 矢口大, 2002, 『平成 14 年度前期内地留学報告書 外国語(スペイン語)』
- 横田・落合・杉浦, 1999 『平成 11 年度 前期内地留学報告書 外国語(スペイン語)』

引用資料

「外国人児童教育 2005」真岡小学校

「不就学ゼロをめざして 外国人のこどもたち！ 私たちと一緒に学校へいこう」広報かに
2005 年 10 月 1 日号